

その後の咸臨丸

■ 4 ■

塚本 謙蔵

乗船を待つ白石藩士
仙台藩一家片倉小十郎邦
窓(一万八千石)は初代景
綱から数え十一代目の白石
城主であった。戊辰戦争の
終結とともに東北・北越路
藩、ここに会津松平家を最
高に滅亡・所管などが行わ
れている。白石片倉領一帯
は南部美濃守二十万石が十
三万石に減額の上、白石城
に転封入城するにおよび、
必然的に片倉家臣千四百六
戸、七千四百余人は親藩・

に願ひ出た結果、幌別郡(現
在の登別市)を太政官より
たまわり、明治三年(一八
七〇年)自費
入植を行つた
が、禄を失つ
た武士に自費
入植は困難で
あった。この
ため政府依存
の入植を嘆願
し、明治四年
三月「北海道
開拓使官邸」
として白石村

最後の乗船者

(現在の札幌市白石区)に
六百人の入植が決定したも
の、移住費用の給費の問
題、移住業務のおくれなど
から入植の知られもなく不
安な日々を送っていた。こ
の状況については、角田縣
武田少参事より東京出張所
前田権少監への書信に如実

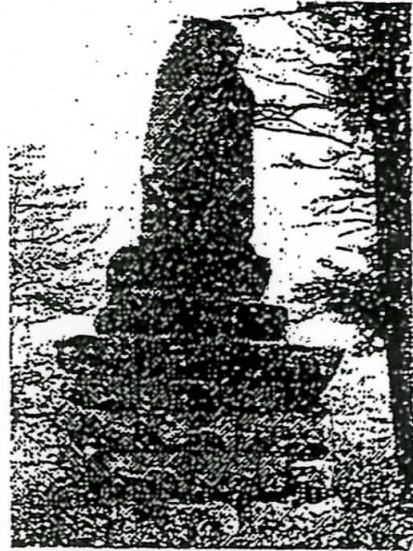
その後、角田県より色部
省への再願書が提出されて
いる。

(略) 六百人員尤疲弊困
難段々情実個別察別格御詮
議ヲ以テ開拓使官邸ニ被成
下候段深察感戴一同當座富
五月中ヲ期トシ乗船彼地へ

移住可成苦ノ処(略) 其マ
マシテハ窮乏ヲ為スルニ三
次(略) 七月
寒風沢に回航さす
移住者、角田県、開拓使、
計木村清吉殿外老人咸臨丸 家)

401人：期待と不安乗せ

入植決定後 遅れた出帆



先人の苦勞をしのばせる白石開
拓碑(札幌市白石区)

一人の下船者もなく
何の前ぶれもなく急に移
住せよとの報である。それ
も三日間、無理であったが、
四百一名咸臨丸に乗船し寒
風沢を出帆したのは旧曆九
月十二日であった。

秋深まる季節の北海道へ
の航海に不安と夢を乗せ、
十七日函館に入港、風待ち
と同時に船旅の疲れで発病
した者、妊婦に対する休息
のための船留めであった。
その間、寒冷地に向かうに
無理と思われる者には下船
し春まで待つことをすすめ
ているが、一名の下船者も
なく全乗船し、出帆を待
った。この両館は因縁の戊
辰戦争終結の地、開拓地に
向かう意欲と複雑な緊張の
日々であったと思われる。

皇打二而出張縣工甲来此
度開拓使官邸林敏一郎殿会
計木村清吉殿外老人咸臨丸 家)